

実施法と評定者間信頼性からみたバウムテスト研究の精度

バウムテスト文献レビュー（第二報）

佐渡忠洋*1

本稿は、わが国のバウムテスト研究の精度を検証するために行われた。1958年から2009年のバウムテストの邦文献の内、部分的な形態基準（指標）を用いてバウムを数量的に検討した176本の論文を検討の対象とし、それらの実施法と評定者間信頼性を検討した。その結果、個別法を採用した論文は12.5%と少なく、集団法を採用した論文は40.3%、実施法が不明瞭な論文は38.6%と多いことが明らかとなった。このことから、実施法が軽視されてきたこと、多くの知見が集団法によって積み上げられてきたことが示唆された。さらに、評定者間信頼性を吟味した研究は13.1%、吟味していない研究は86.9%であった。2000年以降でさえ、吟味している論文は少なかった。このことから、評定者間信頼性が軽視されてきたこと、そのために厳密に言えば、報告されてきた知見の信憑性は疑われることが示唆された。以上のことから、今後は、論文では実施法を明記すること、評定者間信頼性を吟味すること、可能な限り個別法による調査が求められることを提案した。本稿で明らかとなった実情は、他の投映法にも拡大して考えられる問題である。したがって、投映法の研究者はこれらを真摯に反省し、投映法批判に答える姿勢を示すことが求められている。

〈キーワード〉 バウムテスト, 実施法, 評定者間信頼性, 研究の精度, 知見の整理

I 問題と目的

1 研究知見を精査する必要性

わが国のバウムテストに関する論文は700本を超えようとしている（佐渡・坂本・岸本・伊藤, 2010a）。これほどの論文数を有する投映法は、ロールシャッハ法以外に考えられないであろう。それだけバウムテストが臨床家らに認められており、有用なのだと考えられる。しかしながら、これまでに本技法の研究知見は批判的に検証されてこなかった（佐渡・坂本・伊藤, 2010b）。そのため、知見の積み重ねがなされているのかが不明瞭となっており、先行研究を再検討する作業が必要となっている。

ところで、投映法に対する批判はこれまでに多くなされてきた。例えば、岩脇（1973）は、Eysenck, H. J. の意見と同調する形で、そして科学的な心理測定論の立場から投映法を批判し、投映法を用いる臨床家の「無責任さと横暴さ、思い上がり」を指摘している。岩脇の批判は、結果の解釈には検査者の主観性が強く働いており

信頼性が疑わしく、真に客観的な基礎によって妥当性が証明されておらず、投映法は検査状況の影響を大きく受ける、との3点に要約できる。これは主としてロールシャッハ法に対する批判ではあるものの、他の投映法へも拡大し得る批判であろう。近年の投映法批判では、『ロールシャッハテストはまちがっている』（Wood, Nezworski, Lilienfeld, & Grab, 2003/2006）との辛辣な名を冠した書籍がある。本書はロールシャッハ法を厳しく批判し、米国でもわが国でも、投映法使用者に危機感を呼び起こした。Woodらの批判的態度は現代科学に基づいており、関係性や無意識を重要視していないが、そのレビューは極めて論理的で評価できるものであり、批判的言及は首肯できるものが多い。

このような批判を受けながらも、我々は投映法の有用性を体験的に知っているため、容易に手放すことはできない。しかし、投映法を手放さないのならば、彼らの批判に応じる必要があるし、投映法が歩んだ過程を真摯に見つめ、我々の観点と研究知見の有用性を明らかにしなくてはならない。そのためには、外部からのみでなく、

*1 岐阜大学保健管理センター

The accuracy of the “Baumtest” studies from the point of view of the procedure and the interrater reliability : A review of the “Baumtest” II

投映法を用いる者による批判的な検証が行われるべきだと考えられる。

筆者は既に、Evidence Based Medicine の方法論に言及しつつ、バウムテストの研究知見を精査する必要性を提案してきた（佐渡ら，2010b）。本稿で行うのは、その一歩といえる。

2 実施法の問題

あらゆる心理アセスメントが、検査者と被検者との関係性を基にして行われることは言うまでもない。臨床場面にせよ調査場面にせよ、関係性を規定する要因は数多くあるが、その中でも重要な要因の一つに施行場面の構造、即ち、実施法が考えられる。一般に実施法は、検査者と被検者とが 1 対 1 で行う個別法や、検査者（多数の場合もある）が多数の被検者に対して同時に施行する集団法がある。その他にも、検査者が課題を出して次の機会に提出を求める方法や（いわゆる、宿題法）、郵送によって依頼し返送によって受け取る方法（いわゆる、郵送法）もあるが、臨床場面を考えれば、個別法と集団法とに大別できよう。

この実施法は、精神分析で言う空間的構造と考えることができる。空間的構造とは、治療構造を外的なものとの内的なものに分けて考えた場合、外的な治療構造の内にある、面接室の広さや造作、セラピストとクライアントの座り方、セラピストやクライアントの数などのことである（小此木，1981）。この空間的構造と実施法とを重ねて考えると、実施法がいかに大きな要因であるは想像に難しくない。つまり、実施法の要因で被検者はさまざまに影響を受け、そして検査者と被検者との関係性も変化するため、現れる表現も変化する可能性がある。

ところで、個別法は臨床場面で（集団療法などの場合を除いて）、集団法は調査場面で採用されやすいと考えることができる。臨床心理学の研究は、臨床場面へ還元されるべく行われる。であるならば、集団法によって得られた調査研究の知見は、個別法が採用される臨床場面に応用できる形で報告されることが望まれる。そのためには、実施法の要因を解明し、両実施法での結果の相違を明らかにしなければならない。しかし、描画法の結果は実施状況に大きく影響を受けるとの報告があるにも関わらず（Tolor, 1968）、わが国では実施法の要因は未

検討である（佐渡ら，2010）。そのため、そもそも集団法で得られた知見が個別法の解釈に用いることが可能であるのか、またはどの部分で可能であるのかなどが不明瞭となっている。

これは、投映法の中でも描画法で特に当てはまる問題であろう。描画法では、集団法による実施が比較的容易にできる（できてしまう）ために、両実施法での表現の相違が問題となってくるのである。

3 評定者間信頼性の問題

樹木は形態規定性の高い対象のように思われるが、被検者が描くバウムは実に様々である。その複雑な反応を理解する枠組みとして、これまでの研究では指標を用いて数量化し、検討する方法が採用されやすかった（佐渡ら，2010b）。ここで問題となるのが、既存の指標にバウムを当てはめる作業が極めて困難であるということである。「葉」や「実」の有無を問う指標であれば比較的容易なのだが、「幹先端処理」の様式や「曲がった幹」の指標であれば、指標との合致の判断は難しくなってくる。そのため、指標の基準は厳密な表現で設けられるべきだが、研究内容を検討した限り、指標の統一基準も判断基準も十分確立されているとはいえない（佐渡ら，2010b）。

このように、バウム形態と指標との合致の判断が難しい以上、指標によるバウムの評価には慎重であらねばならない。それは指標の基準が明確であったとしても、評価を行う者の習熟度と理解度に大きく依存してしまうためでもある。この問題を解決する方法の一つに、数名の評定者によって合致の判断を行い、最終評価に信憑性を持たせる方法、つまり、評定者間信頼性の吟味がある。この評定者間信頼性の吟味の必要性は、岩脇（1973）も指摘している点であり、観察法による研究でも必須とされている（Bakeman & Gottman, 1997）。

ところで、質問紙を用いた研究では、得られたデータは表に打ち込まれた後に検討されることが多い。しかし、その打ち込みが正確であるのかといった議論はなされなることはまずない。つまり、質問紙研究の場合は、データの打ち込み結果は信頼性を有する、または、例えば人為的ミスが生じていようとも、そのミスは平均が計算されることで考慮しなくてすむ、と考えるからかもしれない。

い。一方、投映法の場合には、そもそも質問紙法のように反応が分類された（分類されやすい）形で産出されないために、つまり「求められる反応の自由度が高い」（田中，2004）がために、質問紙研究では問題とならない評価の信頼性が問題となるのである。

したがって、評定者間信頼性の吟味は投映法研究に付随する作業であり、吟味された結果から知見の集積がなされるべきであるといえる。仮に吟味されないままで研究が多く報告されているならば、我々はそれらの知見の信憑性を疑わなければならない。

4 目的

以上のことから本稿は、わが国で報告されたバウムテスト研究においていかなる実施法が採用されてきたか、そして評定者間信頼性が吟味されてきたかを検討することで、研究の精度を明らかにすることを目的とする。その際、指標（形態基準）によってバウムを数量的に検討した研究を本検討の対象としたい。それは本稿が、一種の先行研究におけるエビデンスの程度を検討するものであるから、数量的な検討を行っている研究がまずは対象とされるべきだと考えるからである。

II 方法

1 対象文献

1958 年から 2009 年までに報告されたバウムテストの邦文献は 696 本であった（佐渡ら，2010a）。その内、数量的にバウムを検討した論文（数量化研究）は 283 本であり、それらの中でも「一線枝」や「一線幹」などの指標を用いてバウムを検討した論文は 176 本であった（佐渡ら，2010b）。本稿ではこの 176 本の論文を検討の対象とした。

対象となった論文は末尾に年代順に記す。その際、分量を考慮して筆頭著者以外は「ほか」と略記し、副題は省略した。論文の詳しい情報は佐渡ら（2010a）を参照されたい。

2 分類基準

実施法は大きく個別法と集団法に分けることができること、そして論文は可能な限り読者が明確に理解できるように記述しなくてはならないことを考慮して、＜個別法＞＜集団法＞＜個別法と集団法＞＜その他・不明＞の 4 つに分類することとした（表 1）。

表 1 実施法の分類基準

個別法	「個別（or 個人）法で実施した」「個別に行った」「1 対 1 で行った」などの記述から、明確に個別法で施行されたと判断できるもの。仕切りを用いたとしても、そして「個別法に近い形」「Intake 時」などのような記載があっても、個別法で行われたとの明確な記述が無い場合は、本項には分類されない。
集団法	「集団法で実施した」「対象者を一斉に実施した」「クラス単位で実施した」などの記述から、明確に集団法で施行されたと判断できるもの。「少人数」「個別法に近い形」との記述があった場合でも、多人数への同時調査と判断された場合には、本項に分類される。
個別法と集団法	上述の「個別法」と「集団法」との両者に該当するもの。例えば、「A 群は個別法で B 群は集団法で実施した」などの研究は本項に分類される。
その他・不明	「Intake 時に行った」「面接時に行った」のように「個別法」とも「集団法」とも明確に判断できないもの、実施法の記述が不明瞭なもの。上記の「個別法」「集団法」「個別法と集団法」の基準を満たしていると判断できないもの、および、郵送を使った実施法は本項に分類される。

表 2 評定者間一致率の分類基準

評定者間信頼性の吟味あり	論文内の記述から、2 名以上の評定者によってバウムが評価されているもの、または評定者らが協議を行うなど何らかの形で評定者間信頼性の吟味を行っている判断できるもの。
評定者間信頼性の吟味なし	上記の「評定者間一致率の吟味率あり」の基準を満たしていないもの。

評定者間信頼性は評価結果が信憑性を有しているかに注目し、＜評定者間信頼性の吟味あり＞＜評定者間信頼性の吟味なし＞の2つに分類することとした(表2)。何名の評定者から検討されているか、その方法は妥当であるかなど、細かく検討することも可能であるが、本稿の目的に対しては本分類で妥当であると考えられた。

3 分類作業

文献は、バウムテストの研究に携わったことがあり、臨床経験を4年以上有する臨床心理士2名の協議によって分類された。分類に際し、実施法や評定者間信頼性に関して、他の論文を参照するよう記述されていた場合には、当該論文を参照の上で分類された。

III 結果と考察

1 実施法について

実施法の分類結果を年代順に示したのが表3である。全体では、＜個別法＞はわずか12.5%であるのに比べて、＜集団法＞は40.3%、＜その他・不明＞は38.6%と多かった。この比率はどの年代においても認められる傾向であった。科学的な研究がこれほど重視されるようになったにも関わらず、2000年以降でもその傾向は変わらず、＜不明・その他＞は19本も認められた。このことから、わが国のバウムテスト研究は、個別法

によるデータではなく集団法のデータで知見が積み上げられてきた傾向が強いこと、実施法が不明瞭で記述が不十分な論文が多いことが示唆された。これらの結果にくわえ、実施法の要因が未検討である現状をふまえると、現在は臨床と研究とに乖離が生じている可能性が推測される。したがって、蓄積されてきた研究知見は、臨床場面（個別法）の解釈にそのまま応用することは困難である可能性が極めて高いといえよう。

集団法による調査が多いことは、研究者にかかる調査の負担が影響しているのではないだろうか。50名を個別法と集団法とで調査すると考えた場合、検査者が負う労力には大きな差がある。負担を嫌って、研究が衰退することは危惧されるが、実施法の要因が解明されていない現在は、可能な限り個別法によるデータから検討されるべきであろう。ロールシャッハ法と比してバウムテストの施行時間が短いことを考えれば、研究者らの努力次第で解決し得る問題だと考えられる。

また、被検者と対峙し、描かれる筆を追いながら、被検者の体験を推察した後にバウムを受け取る個別法は、検査者にとってその見守る体験自体が、後の考察に大きなヒントを与えてくれるはずである。検査者がバウムを解釈し、臨床に活かす知見を得ていくためには、素データであるバウムへのコミットメントは不可欠であろうから、研究者にとって個別法は、豊富な情報を提供してくれる実施法といえよう。

表3 実施法の分類結果:論文数(%)

	1958-1979	1980-1989	1990-1999	2000-2009	計
個別法	2 (1.1)	10 (5.7)	3 (1.7)	7 (4.0)	22 (12.5)
集団法	12 (6.8)	19 (10.8)	17 (9.7)	23 (13.1)	71 (40.3)
個別法と集団法	2 (1.1)	5 (2.8)	5 (2.8)	3 (1.7)	15 (8.5)
その他・不明	16 (9.1)	24 (13.6)	9 (5.1)	19 (10.8)	68 (38.6)
計	32 (18.2)	58 (33.0)	34 (19.3)	52 (29.5)	176

表4 評定者間信頼性の分類結果:論文数(%)

	1958-1979	1980-1989	1990-1999	2000-2009	計
評定者間信頼性の吟味あり	1 (0.6)	5 (2.8)	6 (3.4)	11 (6.3)	23 (13.1)
評定者間信頼性の吟味なし	31 (17.6)	53 (30.1)	28 (15.9)	41 (23.3)	153 (86.9)
計	32 (18.2)	58 (33.0)	34 (19.3)	52 (29.5)	176

表 5 実施法と評定者間信頼性との関連：論文数(%)

	個別法	集団法	個別法と集団法	その他・不明	計
評定者間信頼性の吟味あり	4 (2.3)	10 (5.7)	2 (1.1)	7 (4.0)	23 (13.1)
評定者間信頼性の吟味なし	18 (10.2)	61 (34.7)	13 (7.4)	61 (34.7)	153 (86.9)
計	22 (12.5)	71 (40.3)	15 (8.5)	68 (38.6)	176

2 評定者間信頼性について

評定者間信頼性の分類結果を年代順に示したのが表 4 である。

1958 年から 1979 年の間に＜吟味あり＞は 1 本（山野・武田・橋野・大池・藤原・阿部，1970）のみであった。その後、各年代の＜吟味なし＞に対する＜吟味あり＞の割合はわずかに増加していた。しかし、実施法の検討と同様に、2000 年以降になっても＜吟味あり＞は 11 本と少なく、全体の＜吟味あり＞はわずか 13.1%に留まっていた。このことから、評定者間信頼性を吟味した論文はわずかに増加傾向にあるものの、いまだ吟味した論文は少ないことが示唆された。実施法と評定者間信頼性との関連を見ると（表 5）、＜集団法＞や＜その他・不明＞で＜吟味なし＞の論文は多かった。

以上の結果は、バウムテスト研究の精度を疑わせるものであり、これまで得られた数量的な知見は、信憑性に欠ける可能性が高いことを示唆している。つまり、先行研究の大半は、指標の出現度数が疑わしいため、そこから導き出された解釈も信憑性に欠ける可能性が高いと言わねばならない。

安定し精度の高い知見を報告するためには、評定者の能力を考慮しつつ評定者間信頼性の吟味が必要である。これも実施法と同様に、研究者らの努力で解決し得る問題であろう。

IV 問題とその解決に向けて

1 先行研究の信頼度

本検討から、これまでのバウムテスト研究では実施法が明記されていないものが多く、臨床場面で採用されにくい集団法で知見の多くが集積されており、公表されている数量的データは信憑性に欠ける可能性が高いことが示された。

このことから、筆者は Sokal, A. が起こした騒動を思い起こす。彼はある論文を著名な雑誌に投稿し、それが掲載されてしまった後に、その論文の内容がでたらめであることを発表することで、権威付けのための科学的な説明法を批評した（Sokal & Bricmont, 1997/2005）。彼の悪戯はその後多くの批判を受けるが、投映法の研究者らは、彼が投げ掛けた警告に耳を傾けるべきであろう。即ち、多くの研究は現代科学に即した形で数量的にバウムを検討してはいるが、実のところ、用いている調査と数量化の方法には不備がある可能性が高いということである。

とは言うものの、先行研究がまったく信頼に足らないとは考え難い。それは、調査や数量化の不備ではなく、論文への記述の問題であるかもしれないためである（それだけでも十分問題ではあるが）。したがって、追試や再検討によって乗り越えられ得る課題であろう（そのためには多大なる時間と労力を必要とするのだが）。

このように、研究に不備があるにも関わらず、バウムテストが臨床場面で多用されるのは（小川・福森・角田，2005）、もしかしたら、検査者の軽度の負担で比較的高い診療報酬点数が得られることが関係しているかもしれない（2010 年 3 月現在でバウムテストは、人格検査の内、操作が複雑なものに分類され、280 点とされている）。心理職として収益に貢献するのは当然のことである。ただし、心理臨床家はこうした研究の現状を認識して、バウムテストを用いるべきではないだろうか。既存の解釈仮説を無反省に用いているのではなく、自らが批判的に検討する態度を持ちつつ、知見を臨床場面へ導入しなければならない。でなければ、我々の職業倫理を問われることとなろう。

2 投映法批判に対する姿勢

本検討から、現在の我々のバウムテスト研究の成果が

らでは、投映法批判に対して答えることは難しいと言わざるを得ない。それは、現代科学における基本的な方法論を軽視した代償であろう。この現状から、投映法研究の批判を助長しているのは我々自身であるのではないか、と考えるのは筆者のみであろうか。批判の幾つかは、我々の落ち度を指摘する正当なものが多い、と真摯に受け止める必要もあると思われる。

けれども、投映法批判のすべてを受け入れる必要は決していない、とここで敢えて言わなくてはならない。投映法批判は主として技法の信頼性と妥当性を疑うが、彼らが述べる信頼性と妥当性だけで我々は投映法を用いているのであろうか。投映法から得られる反応は自由度が高いといった心理測定論からの論理ではなく、得られる反応には人間の生き様の一端が表現されており、そこには多面的で多水準のイメージが内包されていると考えた場合、彼らが批判するレベルと我々が有用であると考えるレベルは大きく異なるといえる。

河合（1967）はイメージの特徴として「具象性」「集約性」「直接性」を挙げている。またイメージには、山中（1991）の言う「無意識的身体心像」や、『トムは真夜中の庭で』（Philippa, 1958／2003）に顕れているような「無時間性」という特徴もある。この点を考慮するならば、そこには科学的な信頼性や妥当性という概念では捉えきれないものを投映法の結果は有しているといえる。例えば、再検査信頼性では再現性が問われるが、投映法での表現を“いま、ここで”の一回性ものとするならば、再現性などありようもない。妥当性も同様に、ある表現がある心理的側面を表している時はあるが、そうでない時もあるため、科学としての妥当性は証明することは難しい。

筆者は、現代科学を軽視するつもりはない。ただ、現代科学の方法論を身に着けつつ、なおかつそこに囚われず、中村（1992）が指摘するように、現代科学が扱わなかった「固有世界」「事物の多義性」「身体性をそなえた行為」、即ち「臨床の知」を重視していく態度によって、臨床心理学の研究は展開されるべきだと考えている。したがって、科学的な方法論を十分加味し、信憑性を有した知見を報告することは自明の理であることを十分認識し、そこから臨床心理学の姿勢で、即ち、事例研究

のように丁寧に事象を読み込むように、知見を集積していくことが求められるのではないだろうか。そこに不可欠であり、その根底に求められるのは臨床的なスタンスであって、バウムへの主体的なコミットメントであると考えられる。

3 提言

以上から、今後の投映法研究では以下の点に留意する必要がある。

- ① 採用した実施法を必ず論文に明記すること。
- ② データは個別法で収集されることが望ましい（実施法の要因が検討されていない限りにおいては）。
- ③ 評定者の属性や能力に配慮しつつ評定者間信頼性は必ず吟味すること。
- ④ 投映法批判を意識し、自らの研究を批判的に検討すること。
- ⑤ 個々の事例や集団のバウムを丁寧に読み解く臨床的な研究が必要である。

これらのことを、論文を投稿する側も受理する側も顧慮すれば、研究の精度の向上が期待できるであろうし、クライアントの利益にもなり、臨床心理学の発展に貢献できるであろう。

V まとめ

本稿によって、わが国のバウムテスト研究では、実施法の要因と評定者間信頼性の吟味が軽視されてきたことが明らかとなった。臨床の心理学である以上、実施法や評定者間信頼性など、研究の形に拘泥して“研究のための研究”に陥ることは避けなければならない。とはいえ、臨床場面に還元し得る知見を提供するためにも、“押さえる所は押さえない”といえよう。

また、研究の不備といった実態は、バウムテストに留まらず、他の投映法にも当てはまることが懸念される。したがって、投映法の研究者らは、上述のような提言を行わざるを得ない現状を十分反省すべきであろう。批判に対して、イメージという観点を安易に用いて“言っているレベルが異なるから議論にならない”と答える前に、まずは我々の姿勢を正さなくてはならない。

【付記】

本研究は平成 21-22 年文部省科学研究費補助金(研究活動スタート支援: 21830047) の一部の助成を受けて行われた。

【検討論文(年代順)】

1. 深田尚彦(1958) 幼児の樹木描画の発達的研究. 心理学研究, 28 (5), 286-288.
2. 田尚彦(1959) 学童の樹木描画の発達的研究. 心理学研究, 30 (2), 107-111.
3. 国吉政一ほか(1962) バウムテスト(Koch)の研究(1). 児童精神医学とその近接領域, 3 (4), 47-56.
4. 木村隆夫ほか(1964) 精薄児の Baum test 成績について. 小児の精神と神経, 4 (4), 46-50.
5. 一谷彊ほか(1968) 樹木画テストの研究. 京都教育大学紀要 Ser. A, 33, 47-68.
6. 名倉啓太郎ほか(1968) 児童における樹木画の発達と性格検査としての信頼性と妥当性について. 大阪樟蔭女子大学児童学研究, 4, 59-76.
7. 斎藤通明ほか(1969) バウムテストの研究(第1報). 松仁会誌, 8, 83-92.
8. 山中康裕ほか(1970) 学童の精神医学的追跡調査と学校内力動. 名古屋市立大学医学会雑誌, 21 (1), 70-83.
9. 山野保ほか(1970) Baum Test の研究. 調研紀要, 17, 57-81.
10. 岩川淳ほか(1971) バウム・テスト(Koch)に関する研究. 信愛紀要, 12, 26-53.
11. 斎藤通明ほか(1971) バウムテストの研究(第2報). 松仁会誌, 10, 29-37.
12. 朝野浩(1973) 精神薄弱児の描画の発達. 林勝造ほか, バウム・テストの臨床的研究. 日本文化科学社. pp. 119-162.
13. 斎藤通明(1973) 陳旧性分裂病・うつ状態にみられる特徴. 林勝造ほか, バウム・テストの臨床的研究. 日本文化科学社. pp. 69-101.
14. 津田浩一(1973) 樹木画の発達指標の量的検討. 14. 林勝造ほか, バウム・テストの臨床的研究. 日本文化科学社. pp. 27-55.
15. 山中康裕(1973) 双生児による基礎的研究. 林勝造ほか, バウム・テストの臨床的研究. 日本文化科学社. pp. 1-26.
16. 一谷彊ほか(1975) 投影法での反応と養育環境との関係についての比較研究. 京都教育大学紀要 Ser.

A, 46, 23-46.

17. 宮崎忠男ほか(1975) 精神分裂病者におけるロールシャッハ・テストとバウム・テストとの関係. ロールシャッハ研究, XVII, 25-40.
18. 青木健次(1976) 描画法の再検査信頼性. 心理測定ジャーナル, 12 (8), 11-16.
19. 斎藤通明(1976) 精神分裂病者のバウム・テスト. 心理測定ジャーナル, 12 (8), 11-16.
20. 菅佐和子(1976) バウム・テストとロールシャッハ・テストによる自己像の検討. 心理測定ジャーナル, 12 (5), 19-23.
21. 津田浩一(1976) バウムテストの教示効果について. 心理測定ジャーナル, 12 (3), 5-10.
22. 斎藤通明(1977) バウム・テストの研究(第3報). 松仁会誌, 16, 29-38.
23. 一谷彊ほか(1978) P-F 反応パターンと Baumtest での樹木画パターンとの関係. 京都教育大学紀要 Ser. A, 53, 9-22.
24. 佐藤清公(1978) バウム・テストにみられる老年者の特徴. 浴風会調査研究紀要, 62, 71-76.
25. 佐藤正保ほか(1978) 大学生に集団的に実施したバウムテストの量的分析の試み(第1報). 臨床精神医学, 7 (2), 207-219.
26. 高見良子ほか(1978) バウムテスト(樹木画による人格診断法)の基礎的研究(1). 西宮市立教育研究所紀要, 180, 33-41.
27. 萩尾藤江ほか(1979) 長期間言語訓練を受けた学童口蓋裂児の言語障害と発達上の諸問題. 聴覚言語障害, 8 (2), 67-77.
28. 一谷彊ほか(1979) 高校生徒の体育学習(実技)での行動特徴とバウムテストでの樹木画描出パターンとの関係. 京都教育大学教育研究所所報, 25, 211-222.
29. 小椋たみ子ほか(1979) ハンディキャップをもった子どもの身体イメージの特性. 島根大学教育学部紀要(人文社会科学), 13, 21-41.
30. 佐藤清公(1979) バウム・テストにみられる老年者の特徴. 心理測定ジャーナル, 14 (2), 9-12.
31. 谷口幸一(1979) パーソナリティに関する一発達的研究. 社会老年学, 11, 32-48.
32. 津田浩一ほか(1979) 神経症とバウムテスト. 心理測定ジャーナル, 15 (11), 3-10.
33. 青木健次(1980) バウムテストの臨床的活用. 京都大学学生懇話室紀要, 10, 59-81.
34. 青木健次(1980) 投影描画法の基礎的研究(第1

- 報). 心理学研究, 51 (1), 9-17.
35. 青木健次ほか (1980) バウムテストの臨床的研究 (第3報). 臨床精神医学, 9 (7), 623-631.
36. 岩井寛ほか (1980) 幼児・児童の発達過程に関する「樹の描画」の検討. 芸術療法, 11, 25-37.
37. 中尾舜一ほか (1980) 医学部進学課程学生における7年間隔にみられるイメージ形成の変動. 久留米大学論叢, 29 (2), 99-132.
38. 仙田善孝 (1980) バウム・テストの信頼性. 心理測定ジャーナル, 16 (?), 14-20.
39. 川満 (1981) バウムテストよりみた中学生の非行と登校拒否. 心理測定ジャーナル, 17 (12), 2-6.
40. 谷口幸一ほか (1981) 樹木画法による老年者の描画イメージに関する研究. 老年社会科学, 3, 179-197.
41. 青木健次 (1982) 投影描画法の基礎的研究 (第2報). 京都大学学生懇話室紀要, 12, 55-74.
42. 小山博ほか (1982) 老年期における心理状況について. 大阪市弘済院附属病院研究報告, 昭和57年度調査, 1-33.
43. 中島ナオミほか (1982) 幼児のバウムテスト. 大阪府立公衆衛生研究所研究報告 (精神衛生編), 20, 29-41.
44. 中田義朗 (1982) バウムテストの基礎的研究 (II). 西宮市立教育研究所紀要, 214, 36-47.
45. 齋藤通明ほか (1982) バウム・テストにみられる標準練習過程での心理的变化について. 自律訓練研究, 4 (1), 35-43.
46. 竹島洋一 (1982) バウムテストによる精神遅滞児の発達指標に関する研究. 心理測定ジャーナル, 18 (1), 13-18.
47. 滝口俊子ほか (1982) 発達診断としての幼児の描画. 立教女学院短期大学紀要, 14, 37-49.
48. 津田浩一ほか (1982) 被虐待児の心理特性. 小児の精神と神経, 22 (1), 23-30.
49. 一谷彊ほか (1983) バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否. 京都教育大学紀要 Ser. A, 63, 1-23.
50. 一谷彊ほか (1983) 不純異性交遊児童の人格像. 京都教育大学紀要 Ser. A, 62, 17-39.
51. 森谷寛之 (1983) 枠づけ効果に関する実験的研究. 教育心理学研究, 31 (1), 53-58.
52. 中島ナオミ (1983) 幼児のバウムテスト (第2報). 大阪府立公衆衛生研究所研究報告 (精神衛生編), 21, 13-23.
53. 中田義朗 (1983) バウムテストの基礎研究. 心理測定ジャーナル, 19 (11), 15-20.
54. 齋藤通明 (1983) バウム・テストにみられる心因性視力障害児の心的特徴について. 心理測定ジャーナル, 19 (8), 7-12.
55. 杉村省吾ほか (1983) Der Baumtest の実証的研究. 武庫川女子大学紀要 (文学部編・教育学科編), 31, 67-84.
- 青木健次 (1984) バウム・イメージの多様性と人格. 京都大学学生懇話室紀要, 13, 21-36.
56. 福島章ほか (1984) 児童のバウムテストの比較文化的分析. 安田生命社会事業団研究助成論文集, 19, 135-144.
57. 一谷彊ほか (1984) バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否 (II). 京都教育大学紀要 Ser. A, 64, 1-22.
58. 一谷彊ほか (1984) バウムテストにみられる精神遅滞者の反応特徴. 京都教育大学紀要 Ser. A, 65, 1-27.
59. 川崎晶子 (1984) バウムテストにみる日米少女の自己像. 青年心理, 44, 141-147.
60. 細川久子 (1985) 受傷防止の手がかりを求めて.
61. 一谷彊ほか, バウムテストの基礎的研究. 風間書房. pp. 408-429.
62. 一谷彊ほか (1985) バウムテストの基礎的研究 (I). 京都教育大学紀要 Ser. A, 67, 17-30.
63. 泉澄子ほか (1985) 精神障害者のバウム・テスト2枚法にみられる形態変化. 九州神経精神医学, 31 (2), 185-191.
64. 三原龍介ほか (1985) 小児気管支喘息の心身医学的研究. 思春期学, 3 (1), 69-73.
65. 村沢孝子ほか (1985) バウムテストにおける精神遅滞者の反応特徴 (II). 一谷彊ほか, バウムテストの基礎的研究. 風間書房. pp. 570-576.
66. 中村俊哉ほか (1985) 青年期心性の心理測定学的研究第3報. 上智大学心理学年報, 9, 17-31.
67. 西川満ほか (1985) バウムテストにみられる精神遅滞者の反応特徴 (I). 一谷彊ほか, バウムテストの基礎的研究. 風間書房. pp. 553-569.
68. 西川満ほか (1985) バウムテストにみられる精神遅滞者の反応特徴 (III). 一谷彊ほか, バウムテストの基礎的研究. 風間書房. pp. 577-580.
69. 小沢真ほか (1985) 施設老人と在宅老人とのパーソナリティの比較. 心理測定ジャーナル, 21 (3), 20-25.
70. 齋藤通明ほか (1985) バウム・テストにみられる

- AT 非適応者の心的特徴について (第 2 報). 自律訓練研究, 6 (1), 17-26.
71. 杉村省吾ほか (1985) Der Baumtest の実証的研究. 武庫川女子大学紀要 (文学部編・人間関係コース編), 33, 15-32.
 72. 前村賢一ほか (1986) 聾児が描いた樹木画にみる発達指標と YG 性格検査について. 横浜国立大学教育紀要, 26, 225-240.
 73. 中村延江ほか (1986) 思春期における心理テストの検討. 思春期学, 4 (1), 79-85.
 74. 小川芳子ほか (1986) 集団実施のバウムテストにみる学生気質 (第 1 報). 共立薬科大学研究年報, 31, 17-33.
 75. 藤田裕司 (1987) バウム・テストにおける表現病理 (1). 大阪教育大学障害児教育研究紀要, 10, 25-36.
 76. 藤田裕司 (1987) バウム・テストにおける表現病理 (2). 大阪教育大学教育研究所報, 22, 23-30.
 77. 宮崎忠男 (1987) 精神病患者に対するテスト群 (ロールシャッハ, リューシャー, およびコッホ) を用いての精神診断学的検査の有効性について. 心理測定ジャーナル, 23 (5), 2-7.
 78. 宮崎忠男ほか (1987) 精神分裂病者のバウムテストの因子分析. 心理臨床学研究, 5 (1), 44-50.
 79. 宮崎忠男ほか (1987) 精神分裂病者のバウム・テストにみられる性差について. 心理測定ジャーナル, 23 (9), 14-21.
 80. 杉村省吾 (1987) Der Baumtest の実証的研究. 武庫川女子大学幼児教育研究所紀要, 5 (6), 40-76.
 81. 平山皓ほか (1988) バウムテストの統計学的検討. 第 10 回大学精神衛生研究会報告書, 92-97.
 82. 片岡佳子ほか (1988) 不定愁訴を呈した小児のバウムテストについて. 社会保険神戸中央病院医学雑誌, 2 (1), 13-17.
 83. 南良二ほか (1988) バウムテストによる Duchenne 型患者の精神状態の検討. 昭和 62 年度厚生省神経疾患研究委託費一筋ジストロフィー症の療養と看護に関する臨床的・心理学的研究, 研究成果報告書, 255-257.
 84. 小川芳子 (1988) 集団実施の Baum Test にみる学生気質 (第 2 報). 共立薬科大学研究年報, 33, 9-17.
 85. 周防友彌 (1988) 小児心身症のバウム・テスト. 山口県医学会誌, 22, 149-157.
 86. 阿部清孝ほか (1989) 登校拒否児の状態像の推移に伴うバウム・テストの変化. 小児の精神と神経, 29 (3), 144-150.
 87. 平山皓ほか (1989) バウムテストの統計学的検討 (2). 第 11 回大学精神衛生研究会報告書, 125-128.
 88. 猪野昭二 (1989) バウム・テストによる児童の心理診断. 愛媛県総合教育センター教育研究紀要, 55, 144-148.
 89. 宮崎忠男ほか (1989) 精神分裂病者のバウムテストの因子分析. 心理臨床, 2 (1), 39-49.
 90. 大平典明 (1989) 樹木画テストの不安指標. 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇), 40, 267-277.
 91. 石関ちなつほか (1990) バウムテスト・チェックリストの臨床的有用性について. 心身医療, 2 (7), 1077-1084.
 92. 小林敏子 (1990) バウムテストにみる加齢の研究. 精神神経学雑誌, 92 (1), 22-58.
 93. 武内徹 (1990) Typus melancholicus の文化人類学的考察. とやま県医報, 1022, 18-22.
 94. 石橋富和ほか (1991) バウムテストと顕在性不安尺度. 東大阪短期大学研究紀要, 17, 21-33.
 95. 田崎権一ほか (1991) バウム・テスト描画特徴の横断的研究. 山口大学研究論叢 (第三部), 40, 15-22.
 96. 河合逸雄ほか (1992) 入院患者在宅患者の心的特徴の比較. 厚生省神経疾患研究 3 年度研究報告書筋ジストロフィーの療養と看護に関する総合的研究, 333-336.
 97. 三船直子ほか (1992) バウムテスト 2 回施行法 (試論 I). 大阪市立大学生生活科学部紀要, 40, 313-327.
 98. 澤田和重ほか (1992) 脳器質性疾患者のバウム表現について. 岐阜県立下呂温泉病院・温泉医学研究所年報, 19, 52-56.
 99. 綱島啓司 (1992) 描画テストの基礎的研究. 川崎医療福祉学会誌, 2 (2), 87-96.
 100. 横田正夫 (1992) バウム・テスト. 精神科治療学, 7 (3), 249-257.
 101. 岩川淳ほか (1993) 幼児の樹木画の研究 (1). 信愛紀要, 33, 77-84.
 102. 道又利 (1993) 精神分裂病者の「退行」に関する投影法的研究. 岩手医学雑誌, 45 (2), 165-194.
 103. 赤間立枝ほか (1994) 摂食障害の心理診断と治療. 心身医学, 34 (2), 161-168.
 104. 安藤美華代ほか (1994) 糖尿病患者の心理学的検討. 心身医学, 34 (2), 137-143.
 105. 津田浩一 (1994) 児童の人格と社会的変遷 (I). 小児の精神と神経, 34 (4), 195-206.
 106. 山田英美ほか (1994) 子どもの樹木画 (Part1).

- 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 2, 151-159.
107. 文珠紀久野ほか (1995) Baum Test からみた青年女子の特徴に関する研究 (1). 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 25, 247-260.
 108. 小川芳子 (1995) 樹木画テスト 17 年の経年変化. 共立薬科大学研究年報, 40, 5-17.
 109. 奥田援史ほか (1995) バウムテストにみられる運動選手の反応特徴. 岡山体育学研究, 2, 39-46.
 110. 津川律子ほか (1995) バウムテストにおける四季の影響. こころの健康, 10 (2), 77-83.
 111. 本田優子ほか (1996) 女子大学生の心理理解におけるバウムテストの有用性. 熊本大学教育学部紀要 (自然科学), 45, 223-231.
 112. 近藤春香ほか (1996) 怪我しやすい運動選手のバウム画表現からみた特徴. 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学), 20 (2), 111-119.
 113. 永家美代子ほか (1996) バウム・テストからみた青年女子の特徴に関する研究 (2). 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 26, 133-137.
 114. 樋口日出子ほか (1997) 施設内老人と在宅老人の幸福度の相違. 日本赤十字秋田短期大学紀要, 2, 53-59.
 115. 布井清秀 (1997) 動機付け不良糖尿病患者の心理特性. 日本臨牀, 55 (増刊号), 639-645.
 116. 小川芳子ほか (1997) 樹木画テストからみる心理学的性差. 共立薬科大学研究年報, 42, 47-55.
 117. 石谷真一 (1998) バウムテストにおける検査者の視覚的印象の活用について. 学生相談研究, 19 (1), 1-12.
 118. 森田喜一郎ほか (1998) バウムテストの経時的数値化の試み. 精神科治療学, 13 (10), 1249-1256.
 119. 小栗正幸 (1998) LD とその周辺児童のバウムテストおよび動的家族・学校描画システム法. 臨床描画研究, 13, 71-84.
 120. 大平典明 (1998) 樹木画テストの状態不安指標. 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇), 48, 171-182.
 121. 近藤春香 (1999) 大学生運動選手のバウム画の表現特徴. 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学), 23 (2), 45-52.
 122. 長屋正男 (1999) 児童の人格と社会的変遷 (II). 大阪市社会福祉研究, 22, 64-74.
 123. 齊藤眞ほか (1999) 高齢者の抑うつ感について. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 2, 173-180.
 124. 横田正夫ほか (1999) 精神分裂病患者の彩色樹木画の検討 (第2報). 精神医学, 41 (5), 469-476.
 125. 原千恵子 (2000) 自律訓練法によるバウム・テストと主観的体験の変化. 自律訓練研究, 19 (1・2 合併号), 37-42.
 126. 原幸一ほか (2000) 知的障害をもつ自閉症者のバウムテスト. 心理臨床学研究, 18 (4), 390-395.
 127. 廣川進 (2000) 企業で働き続ける 30 代女性のライフサイクルと心理. 大正大学臨床心理学専攻紀要, 3, 37-50.
 128. 堀場由希子ほか (2000) 青年期の女性における痩せ願望とバウムテストについての一考察. 児童教育学研究, 19, 121-132.
 129. 水口公信ほか (2000) 末期癌患者の樹木画に関する研究. 心身医学, 40 (6), 455-463.
 130. 森田喜一郎ほか (2000) 分裂病者におけるバウムテストの経時的変動. 久留米医学会雑誌, 63 (3-5), 79-85.
 131. 中農浩子ほか (2000) 被虐待児の描画に表現される心理的特性について. 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 36, 48-56.
 132. 出石陽子 (2001) 児童養護施設入所児童の心理的側面に関する研究—バウムテストと SCT を中心に. 東京国際大学大学院社会学研究科応用社会学研究, 11, 61-80.
 133. 五十君啓泰ほか (2001) バウムテストによる精神疾患の鑑別診断の可能性. 九州神経精神医学, 47 (3-4), 129-136.
 134. 中園正身 (2001) 樹木画法の研究 (III). 文教大学人間科学部人間科学研究, 23, 77-84.
 135. 高梨一彦 (2001) バウムテストの全体的印象の評価 (1). 弘前大学医療技術短期大学部紀要, 25, 15-34.
 136. 丹治光浩 (2001) バウムテストの投影性に関する研究. 花園大学社会福祉学部研究紀要, 9, 77-82.
 137. 寺田治史 (2001) 「気になる子」の樹木画研究. 臨床描画研究, 16, 156-171.
 138. 山森路子ほか (2001) バセドウ病患者のバウム・テスト. 平成 11・12 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 課題番号 11410031: バセドウ病患者の人格構造に関する研究 (研究代表者山中康裕), 18-36.
 139. 百々尚美ほか (2002) 小学生における震度と学年の震災ストレス反応に対する影響. ヒューマン・ケア研究, 3 (4), 11-21.

140. 岸本寛史 (2002) バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群. 心理臨床学研究, 20 (1), 1-11.
141. 久保りつ子ほか (2002) 注意欠陥/多動性障害児におけるバウムテストの描画特徴. 臨床精神医学, 31 (4), 427-436.
142. 村田陽子 (2002) セルフ・エスティームと黒・色彩バウムテストとの関連性. 山口大学心理臨床研究, 2, 89-97.
143. 山森路子 (2002) バウム・テストと心理面接からみたバセドウ病患者. 箱庭療法学研究, 15 (1), 31-42.
144. 岡田弘司 (2003) 心理テストからみた解離性障害の心理的特徴と心理的援助について. 関西大学心理相談室紀要, 4, 33-37.
145. 大辻隆夫ほか (2003) 投影樹木画法における実の教示を巡る Buck 法と Koch 法の比較研究. 京都女子大学家政学部児童学研究, 33, 19-23.
146. 市川珠理 (2004) 描画法テストバッテリーにおける順序効果の検討. 心理学紀要 (明治学院大学心理学会), 14, 47-56.
147. 加曾利岳美 (2004) 神経症傾向およびうつ傾向のある大学生に見られるバウムテストの特徴. 共栄大学研究論集, 3, 106-122.
148. 桑田直弥ほか (2004) 高齢者回想グループの効果に関する一研究. 児童・家族相談所紀要, 21, 61-67.
149. 中島登代子ほか (2004) スポーツ競技場面の特異性に関する研究 (1). 臨床スポーツ心理学研究, 1, 41-50.
150. 中鹿彰 (2004) バウムテストから見た広汎性発達障害の認知特徴. 心理臨床学研究, 21 (6), 611-620.
151. 浪岡美保ほか (2004) 小学生におけるバウムテスト調査の比較研究. 北海道教育大学教育実践総合センター紀要, 5, 235-241.
152. 桑代智子 (2005) 健常児のバウムテストにおける加齢にともなう変化. 人間文化研究科年報, 21, 117-127.
153. 長野正稔 (2005) 被虐待児童のバウムテストに関する予備考察. 研究紀要, 27, 35-40.
154. 大辻隆夫ほか (2005) 保育における水遊びの効果に関する一研究. 京都女子大学発達教育学部紀要, 1, 51-61.
155. 坂口守男ほか (2005) 地域在住高齢者のバウムテスト. 大阪教育大学紀要第Ⅲ部門, 53 (2), 83-93.
156. 山森路子 (2005) 甲状腺患者の心理. 臨床心理学, 5 (2), 197-201.
157. 川原恭子ほか (2006) 起立性調節障害を伴う不登校小児の樹木画. 心身医学, 46 (2), 138-143.
158. 松下姫歌 (2006) バウムテストに見られる肥満児の心理的特徴. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 55, 219-226.
159. 坂口守男ほか (2006) 地域在住高齢者のバウムテスト (Ⅳ). 大阪教育大学紀要第Ⅲ部門, 55 (1), 107-116.
160. 山口智 (2006) 想像上の仲間に関する研究. 心理臨床学研究, 24 (2), 189-200.
161. 山口智子ほか (2006) 児童虐待のスクリーニング法としてのバウムテストの臨床的有用性. 上越教育大学心理教育相談研究, 5, 27-36.
162. 長野正稔 (2007) 被虐待児童のバウムテストに関する考察. 北海道中央児童相談所研究紀要, 28, 27-37.
163. 佐々木貴弘 (2007) : 樹木画テスト 3 枚法におけるウロに関する研究. 創価大学大学院紀要, 29, 207-238.
164. 田邊敏明 (2007) 教師による児童の行動評定とバウムテストの特徴との関連. 山口大学研究論叢 (芸術・体育・教育・心理), 57, 169-184.
165. 山崎信弘 (2007) 樹木画テストにおける心理学的サインの妥当性に関する研究. 創価大学大学院紀要, 29, 227-291.
166. 依田茂久 (2007) 樹木画テストにおける近年の児童の発達状況の変化について. 臨床描画研究, 22, 187-210.
167. 吉田芙悠紀ほか (2007) 青年期の友人関係とバウムテストに見られる特徴との関係. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 6, 113-128.
168. 岸川加奈子 (2008) バウムテストにみる現在と過去の 5 歳児比較. ヒューマンサイエンス, 11, 381-402.
169. 松岡舞 (2008) 樹木画テストにおける「擬人的な木」に関する研究. 創価大学大学院紀要, 30, 359-384.
170. 松浦さほほか (2008) スポーツ競技者のバウムに関する基礎的研究. 岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学), 56 (2), 159-166.
171. 田山淳 (2008) 中学生における登校行動とバウムテストの関連について. 心身医学, 48 (12), 1033-1041.
172. 児玉恵美 (2009) バウムの幹先端処理に示される境界の側面の研究. 九州ルーテル学院大学心理臨床センター紀要, 8, 27-32.
173. 村山憲男ほか (2009) 抑うつ傾向を有する高齢者

- の脳機能および心理的特徴. 精神医学, 51 (12), 1187-1195.
174. 長野正稔 (2009) 続・被虐待児童のバウムテストに関する考察. 北海道中央児童相談所研究紀要, 29, 41-53.
175. 佐渡忠洋ほか (2009) バウムテストの幹先端処理に関する基礎的研究. 心理臨床学研究, 27 (1), 95-100.
176. 佐渡忠洋ほか (2009) 集団スクリーニングへのバウムテストの導入可能性. CAMPUS HEALTH, 46 (1), 392-394.

【引用文献】

1. Bakeman, R., and Gottman, J. M. (1997) *Observing Interaction : An introduction to sequential analysis, 2nd*. Cambridge : Cambridge University Press.
2. 岩脇三良 (1973) 心理検査における反応の心理. 日本文化科学社.
3. 河合隼雄 (1967) ユング心理学入門. 培風館.
4. 中村雄二郎 (1992) 臨床の知とは何か. 岩波書店.
5. 小川俊樹・福森崇貴・角田陽子 (2005) 心理臨床の場における心理検査の使用頻度について. 日本心理臨床学会第24回大会発表論文集. 263.
6. 小此木啓吾 (1981) 精神療法の構造と過程, その1-2. 小此木啓吾ら (編), 精神分析セミナー I. 岩崎学術出版社. pp. 1-83.
7. Philippa, P. (1958) *Tom's midnight garden*. Oxford : Oxford University Press. 高杉一郎 (訳) (2003) トムは真夜中の庭で, 新装版. 岩波書店.
8. 佐渡忠洋・坂本佳織・岸本寛史・伊藤宗親 (2010a) 日本におけるバウムテストの文献一覧(1958-2009年) 岐阜大学カリキュラム開発研究, 28(1), 33-57.
9. 佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親 (2010b) 日本におけるバウムテスト研究の変遷—バウムテスト文献レビュー (第一報). 岐阜大学カリキュラム開発研究, 28(1), 12-20.
10. Sokal, A. and Bricmont, J. (1997) *Fashionable nonsense : Postmodern intellectuals' abuse of science*. New York : Picador. 田崎晴明・大野克嗣・堀茂樹 (訳) (2005) 「知」の欺瞞—ポストモダン思想における科学の濫用. 岩波書店.
11. 田中富士夫 (2004) 投映法 (投影法). 氏原寛・亀口憲治・成田義弘・東山紘久・山中康裕 (編) 心理臨床大辞典, 改訂版. 培風館. pp. 519-523.
12. Tolor, A. (1968) The Graphomotor Techniques. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 32 (3), 222-228.
13. Wood, J. M., Nezworski, M. T. Lilienfeld, S. O. and Grab, H. N. (2003) *What's wrong with the Rorschach? : Science confronts the controversial Inkblot Test*. New York : John Wiley & Sons, Inc. 宮崎謙一 (訳) (2006) ロールシャッハテストはまちがっている—科学からの異議. 北大路書房.
14. 山中康裕 (1991) 老いのソウロロジー (魂学) —老人臨床での「たましい」の交流録. 有斐閣.
15. 山野保・武田正己・橋野廸夫・大池千尋・藤原謙三・阿部淳子 (1970) Baum Test の研究. 調研紀要, 17, 57-81.